

令和5年度

社会人特別選抜試験問題

保健福祉学部 保健福祉学科	看護学コース 理学療法学コース 作業療法学コース コミュニケーション障害学コース	小論文
------------------	---	-----

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子（8頁）には、解答用紙（3枚）及び下書き用紙（1枚）が挟み込んであります。試験開始の合図があったら、直ちに中を確認、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出なさい。
- 3 問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出して、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙の所定欄に記入しなさい。
- 5 句読点は、1字と数えなさい。
- 6 試験室で配付された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰りなさい。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

課題文を読み、後の問いに答えなさい。

【課題文】

社会的な絆きずなを作る際に中心的な役割を果たすのが笑いだ、と私が気づいたのは、ロンドンの某有名会計事務所が実施した管理職ワークショップへの参加を依頼されたときだった。その日の早朝、私たちは果物とクロワッサンの朝食会に集まった。ほとんどの人は一人、または二人連れで、誰もが話し相手もないまま、クロワッサンとコーヒーを手に居心地悪そうに立っていた。やがて午前九時になると、私たちは別室に案内され、着席するよう促された。私たちは席に着き、さてこれから何が起きるのかと期待しながら待っていたが、なぜか何も起こらない。そのうち出席者たちはそわそわと足を組み替えたり、周囲の人を盗み見たりしはじめた。集まっていたのはてんでばらばらの面々で、カジュアルな服装の人もいれば、ロンドン風のクールな装いで決めている人も、さらには通りの先にある官庁街からうっかり迷い込んできたかのようなピンストラップのスーツを着た年配男性も二人いた。共通していたのは、誰もが困惑の表情を浮かべているということだけだ。すると突然、部屋の前方にいた一人が立ち上がり、「彼らは〇〇〇と思っている」（正確には覚えていないが、空は青いかいったあたりさわりのない内容だった）と大きな声で言い、すぐに着席した。静寂。一分後、別の誰かが立ち上がり、またも同じことをした——今度は「彼らは地球が丸いと思っている」とかなんとか言っていた。室内に困惑の空気が漂う。官庁街風の例の紳士たちは明らかに逃げ出したがっていた。すると三人目の人物が立ち上がり、「彼らは〇〇〇と思っている」とまた別のことを言った。まさにすべてが奇妙の一言で、全員が困った顔で足元に目を落とした。すると部屋の後ろにいた人物がユーモアたっぷりに「私は、ここにいる全員がこの状況にぎよっとしている、と思っている」と大声で言った。最初の三人同様、この人物も主催者側が仕込んだ役者だったのかもしれないが、この言葉を聞いたとたん部屋にいた全員がどっと笑った。これで緊張が解けた私たちには、グループとしての結末が生まれ、その日のワークショップはスムーズに進んだ。みんな、お互いを何年も前から知っているような気分になっていたからだ。それはまさに、参加者の緊張を解きほぐす完璧な方法で、よくあるかしこまった自己紹介より一〇〇倍マシだった。順番に自分の名前やなぜここにいるのかを

話したところで、どうせみんなすぐに忘れてしまう。知っておくべきは、相手の名前でもなければ所属する会社でもなく、みんな仲間だというただその一点だったのだ。

笑いは人間の共通言語だ。部族も文化も関係なく人はみな笑うし、笑う理由もほぼ同じで、ほかの人の失敗や、バナナの皮で滑ったといったちょっとしたアクシデント、ジョークなどだ。また、ほかの人の笑いにつられて笑うことだってある。笑いは無意識かつ本能的なものであるうえ、恐ろしく伝染しやすい。何人かで話しているときに誰かが笑えば、たとえそのジョークが聞こえていなくても、つい一緒に笑ってしまう。故ロバート・プロヴァインは、笑いの研究の第一人者で、ほかの誰よりも笑いという行為に科学的関心を注いでいたが、彼は何年も前から、私たちは一人でいるときより集団でいるときのほうが笑いやすい、と指摘していた。そこでそれを確認しようど、私たちは被験者たちにお笑いのビデオを一人で、または三、四人のグループで鑑賞してもらう実験を行った。すると同じビデオを見ていても、グループで見ているときのほうが一人で見ているときより、笑う可能性が四倍高かったのだ。これは非常に不思議だった。自然界でこれに一番近い例として思いつくのは、南米のホエザルが夜明けにいっせいに騒々しい声を上げるあの大合唱だ。一頭が鳴き声をあげ、次第にほかのホエザルたちも鳴きはじめるところは、まるで集団の笑いをスローモーションで見ているかのようだった。

笑うと呼吸は速くなり、口が開く。また、「口が丸く開いた (ROM) 顔」と呼ばれる非常に特徴的な表情により、歯は唇に覆われる。じつはこの特徴的な表情も、息切れのような笑いも、旧世界ザルや類人猿がじゃれているときに見せる表情と声に由来している。彼らはその表情と声によって相手を遊ばせに誘い、これは遊びだからね、と相手に伝えているのだ。つまり「私が次に何をしても [キスをして、噛みついて] 真に受けなくてね！パニックになったり、噛みつき返したりしないでね！」と言っているのだ。しかし大型類人猿は笑いを、もう少しヒトに近い方法で使っているようで、ユーモアのセンスがあるらしい、とも言われている。ヒトとの違いは、彼らは独りで笑うが、私たちはほかの人たちと声をそろえて笑うところだ。

類人猿とヒトの笑いは少し違い、私たちヒトは発声方法をちょっと変えている。サルや類人猿の笑いはたんに呼気と吸気が連なるだけで、ハッア……

ハッアー……ハッアー……といった調子だ。いっぽう私たち人間はこれを少し変え、呼気の合間に吸気を挟まず、ハッ……ハッ……ハッ……といった感じで笑う。こうやって笑うと肺の中の息はすぐになくなってしまうため、「笑いすぎて死にそう」という状態になる。これは、腹の底から盛大に笑いすぎて、息が続かなくなるからだ。だがサルや類人猿にこういうことは起こらない。彼らの笑いはもっとおとなしく、しいて言えば私たちのお愛想笑いに近い。いっぽう私たちのような笑い方だと、肺から空気を追い出すときに横隔膜と胸膜がポンプのように激しく動くうえ、肺が空っぽになることで横隔膜と胸膜の筋肉に非常に大きな負担がかかる。そしてそのポンプのような動きと酸欠状態が、エンドルフィン^{註1)}系を活性化させるのだ。

笑いには心からの笑いと言意識的な笑い（愛想笑い）があるが、この二つには重要な違いがある。心からの笑いは、それを最初に指摘した十九世紀の偉大な神経学者、ギョーム・デュシェンヌの名にちなんでデュシェンヌ・スマイルと呼ばれ、愛想笑いは非デュシェンヌ・スマイルと呼ばれている。非デュシェンヌ・スマイルとはいわゆる作り笑いで、面白くないジョークを聞かされたときや、相手の気分を損ねないようとりあえず笑うときの笑いだ。だがこの手の笑いだと、エンドルフィン系を活性化するだけの力はないだろう。いっぽう心からの笑い、すなわちデュシェンヌ・スマイルは、カラスの足跡と呼ばれるシワが目じりに寄ることでそれとわかる。笑ったときに目がきらきらと輝くのはこのシワのせいだ。じつはこのシワに関わる筋肉は意識的に動かさないのだから、故意にカラスの足跡を作ることはできない。それができるのは心から笑ったときだけで、非デュシェンヌ・スマイルでこのシワが現れることはない。だからもし、相手があなたのジョークを本当に面白いと思っているか知りたいのなら、このカラスの足跡をチェックするといい。

私たちは、短いビデオを見る前後に被験者の痛覚閾値^{註2)}の変化を調べる実験を繰り返し実施した。被験者の半分にはお笑いビデオを、残りの半分にはどちらかと言えば退屈なドキュメンタリーや教育ビデオを見てもらうという実験だ。レベッカ・バロンは、世界最大の芸術祭、エジンバラ・フェスティバル・フリンジでもこの実験を行い、ライブのお笑いや演劇を鑑賞した人を検査した。どの実験でも、お笑いを鑑賞して笑った人は痛覚閾値の上昇、つまりエンドルフィン系の活性化が見られた。いっぽう特に面白いというわけではないビデオを

鑑賞して笑わなかった人たちの痛覚閾値は低下した——まるで過去の痛みを皮膚が思い出したかのように、痛覚閾値が下がったのだ。その後、サンドラ・マンニネンとラウリ・ヌメンマーはPET^{注3)}を使った脳の画像検査で、笑いは本当にエンドルフィン系を活性化させるのかを調べ、そのとおりであることを確認した。笑いによって、脳内にはエンドルフィンがどっと放出されたのだ。

笑うことで放出されたエンドルフィンでくつろぎや安らぎを覚えるのであれば、一緒に笑った人たち同士の絆は強まり、個人的なことを打ち明けたり、お互いに寛大になったりもするのではないだろうか。そう考えた私たちは、それを確かめるために一連の実験を行った。アラン・グレイは被験者たちにお笑いビデオを見せてひとしきり笑わせてから、見知らぬ人に個人情報も教えてもいいという気持ちが強くなったかを彼らに尋ねた。被験者自身は、笑ったことで個人情報開示に対する自分の気持ちが変わったとは思っていなかったが、独立した評価者から見ると、彼らの気持ちは明らかに変わっていた。おそらく、笑いによってエンドルフィンが放出されたせいで、被験者たちは一緒に笑った人たちに親しみを感じるようになり、警戒感が薄れたのだろう。

出典：ロビン・ダンパー（著），吉嶺英美（訳）『なぜ私たちは友だちをつくるのか 進化心理学から考える人類にとって一番重要な関係』，青土社，2021年 一部改変

注1) 脳内で働く神経伝達物質（内分泌ホルモン）の一種。鎮痛効果や気分の高揚・幸福感などが得られる。

注2) 痛みの感じやすさのことである。痛覚閾値が下がると、痛みを感じやすくなり、痛覚閾値が上がると、痛みを感じにくくなる。

注3) Positron Emission Tomography（陽電子放出断層撮影）の略。放射性薬剤を体内に投与し、その分析を特殊なカメラで撮影して画像化する。核医学検査の一種。

【問1】 下線部の状況になった理由を 50 字以内で述べなさい。

【問2】 類人猿とヒトの笑いの違いについて、150 字以内で述べなさい。

【問3】 社会の中で笑いの効果がどのように活かされるかについて、筆者の考えをまとめたうえで、あなたの考えを 400 字以上 500 字以内で述べなさい。